日本語とベトナム語の手段結果複合動詞の対照研究

Comparison of causative and resultant compound verbs in Japanese and Vietnamese

ドー・ティ・スアン・トゥ*

DO Thi Xuan Thu

（要旨）

日本語の手段結果複合動詞は構成素が他動性に関しては同一のものしか組み合わされない「他動性調和の法則」があるが、ベトナム語では他動詞と自動詞の組み合わせが許される。その原因は、日本語は複数の述語を１つの動詞に合成することが出来るのに対して、ベトナム語は複数の述語を複数の位置に代入することが出来るからである。更に、日本語の手段結果複合動詞は語彙レベルで、働きかけを表す前項動詞と働きかけと同時に状態/位置変化の結果を含意する後項動詞の使役動詞と結合し、形成される。一方、ベトナム語の手段結果複合動詞は統語レベルで、連結動詞句で、働きかけのみを表す前項動詞の他動詞と状態/位置変化の結果を表す自動詞の結合から形成される。従って、この観点から、日本語の手段結果複合動詞とベトナム語の手段結果複合動詞における他動性調和の不一致と主語一致の不一致などに対し、合理的な説明を与えることが出来る。

キーワード　手段結果複合動詞　働きかけ動詞　使役動詞　他動性調和

1　はじめに

本稿では､日本語とベトナム語の手段結果複合動詞について論じる。手段結果複合動詞とは｢切り倒す/đốn ngã」の様に、前項動詞（V1）が後項動詞（V2）に先行し、後項の手段となる行為を表す動詞である。更に、後項動詞は前項動詞の行為に伴う目的語の状態/位置変化の結果を表す動詞である。

日本語の手段結果複合動詞の構成素は､前項動詞が動作動詞と後項動詞が使役動詞と結合する。つまり､意図的な行為を表す複合動詞であると言う点では研究者の見解は一致している。例えば､影山（1993）の「他動性調和の原則」と、松本（1998）の「主語一致の原則」に基づいて、日本語の手段結果複合動詞の制限は前項動詞、後項動詞共に他動詞/非能格動詞同士の組み合わせるとなる。（1）を見られたい。

（1）a. 男が木を切り倒した。　（cf.影山1993:116）

　　b. *男が木を切り倒れた。

* 山口大学大学院東アジア研究科博士課程２年（The Graduate School of East Asian Studies, Yamaguchi University）

(1)aのように、日本語では前項動詞の「切る」と後項動詞「倒す」は両者が他動詞である。しかし、(1)bのような前項動詞が他動詞「切る」と後項動詞が自動詞の「倒れる」である手段結果複合動詞は許されない（cf.影山1993)。しかし、ベトナム語の手段結果複合動詞の構成素は日本語と逆の論理によって形成される。(2) を見られたい。

(2) a. Tôi đã bẻ gãy cây. (cf.Nguyen Thi Hai Yen 2016:38を筆者改変)
私 過去 折る 折れる 木
私は木を折った結果、それが折れた。

b. Tôi đã bẻ cho gãy cây.
私 過去 折る させる 折れる 木
私は木を折って、それが折れるようにした。

c. Tôi đã bẻ gãy cây thành ba.
私 過去 折る 折れる木 telic 3
私は木を折った結果、それが3つに折れた。

ベトナム語では、手段結果複合動詞は前項動詞の他動詞と後項動詞の自動詞を複合することを許す。その原因は、状態/位置変化の結果を表す後項動詞の自動詞は単に添加された要素ではなく、主要部（主の動詞－前項動詞）共に、ベトナム語の手段結果複合動詞の構成素になるからである。

日本語（1）と比べれば分かるように、日本語の手段結果複合動詞は「他動詞/非能格動詞＋他動詞」の組み合わせしか許されないのに対して、(2) のベトナム語では「他動詞＋自動詞」の組み合わせしか許されない。更に、(2)aのように「cho－させる」という使役を表す語を挿入すると、動作主の目的がよりはっきり、強調される。又、(2)cのように状態/位置変化の結果を明確に表示するために「thành－telic」と言う結果を表す副詞を入れることも可能である。その原因は何だろうか。

筆者の見解は次の通りである。

① 日本語は複数の述語を1つの動詞に合成することが出来る。(1)aのような日本語の手段結果複合動詞は「〈手段〉＋〈使役〈結果〉〉」の3つの述語を合わせた1つの動詞にすることができる。従って、使役を表す要素は顕在的に表示する。それに対して、ベトナム語は複数の述語を複数の位置に代入して、(2)bと (2)cのような使役や結果を明確に表したい場合は使役を表す語や結果の副詞を挿入する。(2)aのような「〈手段〉＋〈結果〉」使役を表す語を挿入しない場合は、使役の解釈は文脈に基づいて発生する。従って、ベトナム語の手段結果複合動詞の使役を表す要素は日本語と異なり、潜在的に表示することが分かる。

② 日本語とベトナム語は複合のレベルが異なる。日本語の手段結果複合動詞の使役を表す要素は顕在的に表示する。そのため、生起可能な結果を表す要素（V2）は行為動詞（V1）の範囲を推測することができる。言い換えれば、行為動詞（V1）の語彙概念の構造すなわち辞書情報から状態述語（V2）が予測でき、日本語の手段結果複合動詞は生産性と意味透明性が低く、語彙レベルで形成されることが支持される。

それに対して、ベトナム語の手段結果複合動詞はV1とV2の間の使役の要素を顕在的に表示

しないため、当然意図的な行為を表さない。従って、生起可能な結果を表す（V2）は行為動詞（V1）の語彙概念の構造から判断できない。Ｖ１の行為動詞の辞書情報からV2の結果が予測できず、予想外の結果が現れる。つまり、ベトナム語の手段結果複合動詞は生産性が高い。更に、ベトナム語の手段結果複合動詞は1つの動詞の意味から全体の複合動詞の意味が判断でき、意味的に透明性が高い。そのため、ベトナム語の手段結果複合動詞は統語レベルで形成されることが支持される。

本稿では、第2章で日本語の手段結果複合動詞の他動詞/非能格自動詞同士の制限を概観する。第3章では働きかけ動詞（状態/位置変化を伴わない動詞）と使役動詞（状態/位置変化を伴う他動詞）について検討する。更に、日本語の手段結果複合動詞は語彙レベルで、複数の述語を1つの動詞に合成するために、構成素が他動性に関して、同一のものしか組み合わされないこと、一方、ベトナム語の手段結果複合動詞は、複数の述語を複数の位置に代入し、前項動詞の他動詞と後項動詞の状態/位置変化の自動詞と複合すること、更に、統語レベルで形成されることを述べる。この観点から、第4章では日本語、ベトナム語共に存在する手段結果複合動詞の構成素について比較検討する。

２　日本語の手段結果複合動詞の構成構造

由本（1996:110）によると、手段結果複合動詞は日本語の複合動詞の中で最も生産性が高いタイプである。BYで関連付けられる2つの事象は当然意図的な行為を表すので、前項動詞と後項動詞の動作主が同定される。つまり、日本語の手段結果複合動詞の前項動詞と後項動詞は他動詞/非能格動詞同士の組み合わせの複合である。

更に、松本（1998:52）によると、下の（3）に挙げた日本語の手段結果複合動詞は前項動詞（V1）が後項動詞（V2）に時間的に先行する。その上、前項動詞は全て動作主的動詞であり、又、後項動詞は何らかの状態/位置変化の使役を表す動詞であり、つまり使役動詞である。

（3）　押し出す　　叩き落す　　打ち上げる　　掃き集める　　投げ飛ばす

（4）　a. 男が木を切り倒した。　（cf.影山1993:116）

　　　b. *男が木を切り倒れた。

(4)aでは、V1とV2は意図性を持って、V1の働きかけ動詞（切る）とV2の使役動詞（倒す）と複合して手段結果複合動詞（切り倒す）を形成する。逆に、(4)bのように、V2に意図性を持たない非対格自動詞（状態/位置変化自動詞）が含まれる複合動詞（*切り倒れた）は許されない。このような現象を影山（1993）の「他動性調和の原則」と松本（1998）の「主語一致の原則」によって説明する。

（5）　他動性調和の原則（cf.影山1993:117）

　　　動詞は単純に他動詞と自動詞しか存在せず、自動詞は非能格自動詞と非対格自動詞の2つに分類される。以下に他動詞、非能格自動詞、非対格自動詞の3分類を表示する。

　　　a. 他動詞：　　　（x 〈y〉）

　　　b. 非能格自動詞：（x 〈 〉）

c. 非対格自動詞：　〈y〉

（5）に示した日本語のV－V型の複合動詞は、他動詞は他動詞と自動詞は自動詞と結合するだけではない。つまり、他動詞（5)a、非能格自動詞（5)b共に外項（x）を持つため、「他動詞＋他動詞」、「非能格自動詞＋非能格自動詞」だけでなく、他動詞と非能格自動詞を結合することも出来る。一方、非対格自動詞（5)cは内項（y）しか存在せず（5)aと（5)bとは形式が異なるため、非対格自動詞は非対格自動詞とのみ結合する。この他動性調和の原則に基づいて、日本語のV－V複合動詞は最大限次の（6）に示した5種類の複合ができる。

（6）①　他動詞＋他動詞：切り倒す、押し倒す、叩き壊す

②　非能格自動詞＋非能格自動詞：言い寄る、這い寄る、駆け降りる

③　非対格自動詞＋非対格自動詞：滑り落ちる、立ち並ぶ、生えかわる

④　他動詞＋非能格自動詞：探し回る、飲み歩く、しゃべり回る

⑤　非能格自動詞＋他動詞：泣き落とす、勝ち取る

更に、松本（1998:72）は「『主語（卓立項）一致の原則』は2つの動詞の複合においては、2つの動詞の意味構造の中で最も卓立性の高い参考者（通例、主語として実現する意味的項）同士が同一物を指さなければならない」と定義している。この原則に基づいて、日本語の手段結果複合動詞の2つの動詞の主語は同一でなければならない。又、前項動詞と後項動詞は他動詞/非能格動詞同士の複合である。従って、(4)bの前項動詞（切る）の主語は動作主（男）であるのに対して、後項動詞（倒れる）の主語は目的語（木）であり、「主語一致の原則」に従っていないので、不適格になる。

このように、日本語の手段結果複合動詞は「他動性調和の原則」と「主語一致の原則」の制限があるので、前項動詞の働きかけ動詞（状態/位置変化を伴わない動詞）と後項動詞の使役動詞（状態/位置変化を伴う他動詞）を結合しなければならない。つまり、他動詞と非能格動詞同士を組み合わせなければならない。

3　日本語とベトナムの働きかけ動詞と使役動詞

普通他動詞は、その節の中で目的語をとり、主語から目的語に及ぶ動作で、同時に目的語の状態/位置変化を表す動詞である。しかし、他動詞の中に活動しか表さない動詞（状態/位置変化を伴わない動詞）も存在する。次の3.1と3.2では働きかけ動詞と使役動詞の具体的な性格を説明する。

3.1　日本語とベトナム語の働きかけ動詞

働きかけ動詞とは状態/位置変化を伴わない他動詞と非能格自動詞で、働きかけのみを表し、結果がどうなるかの意味を含意しない動詞である（cf.影山:1996）。日本語、ベトナム語共にこのような働きかけを表す動詞が存在する。

日本語では、結果を含意せずに働きかけだけを表す他動詞は、次の（7）が代表的なものである。

（7）叩く、蹴る、こする、振る、ねじる、触る、誉める、読む（cf.影山1996:242）

(8) 私は子供を叱ったが、子供が聞かなかった。
(9) 私はマッチを擦ったが、火が出なかった。

(8)と(9)は働きかけのみ表す他動詞「叱る、擦る」の目的語は働きかけの及ぶ作用対象に過ぎず、状態/位置変化の対象ではないので、対象が否定文「聞かなかった、出なかったでも適用できる。

次は、ベトナム語の働きかけを表す他動詞である。

日本語と同様にベトナム語では状態/位置変化を伴わない他動詞が多い。Nguyen Thi Thu Huong (2010:117)によると、「「đọc」(読む)、「nhìn、xem」(見る)等」は動作主が活動しか表さず、目的語の状態/位置変化に言及しない動詞である(筆者訳)。つまり、これらの動詞は状態/位置変化を伴わない動詞である。次の(10)はその代表的なものである。

(10) nhìn、xem－見る、đọc－読む、nghe－聞く、vẽ－描く、viết－書く、xây－建てる、bảo－諭す (cf. Nguyen Thi Thu Huong 2010: 119)

(11) Tôi đã bảo nó、 nhưng nó không nghe.
私 過去 諭す あいつ しかし あいつ ～ない 聞く
私はあいつを諭したが、聞いてくれなかった。

(12) Tôi đã đọc truyện này、 nhưng tôi không hiểu
私 過去 読む 小説 この しかし 私 ～ない 分からない
私はこの小説を読んだが、分からなかった。

日本語と同様に、(11)と(12)では、「bảo－諭す、đọc－読む」の他動詞は単純に動作主の動作を表し、状態/位置変化の結果を表さないので、対象が否定文「không nghe－聞いてくれなかった、không hiểu－分からなかった」でも適用できる。

このように、3.1では、働きかけしか表さない動詞、つまり状態/位置変化を伴わない他動詞について説明した。このような動詞は日本語、ベトナム語共に存在する。

次の3.2では、使役動詞(状態/位置変化を伴う他動詞)について説明する。

3.2 日本語とベトナム語の使役動詞

影山(1996)は「使役動詞とは主語の何らかの行為によって、目的語の状態変化ないし位置変化が引き起こされる動詞である」とする。言い換えれば、これらの動詞は働きかけと同時に状態/位置変化の結果も含意する動詞である。このような他動詞は日本語、ベトナム語共に存在する。しかし、日本語の使役動詞が単純な動詞であるのに対して、ベトナム語は単純な動詞のタイプと複合動詞のタイプがある。

更に、Nguyen Thi Ai Tien (2014)は日本語の使役動詞はベトナム語の他動詞と自動詞の連結に対応するとしている。その原因は、日本語の使役動詞は働きかけと状態変化の結果を含意するのに対して、ベトナム語の使役動詞は単に動作主の行為のみを表し、非対格自動詞は、目的語の状態/位置変化しか表さないからである。そのため、日本語の使役動詞を表現するためには、ベトナム語では前項動詞の他動詞の主語の働きかけと後項動詞の非対格自動詞の目的語の状態/位

置変化を連結しなければならない。

Nguyen Thi Ai Tien (2014) の研究は正しいが、更に詳しく分析すれば、日本語とベトナム語の言語類型的特徴のため、2つの言語の使役を表す要素の表示が異なるからである。日本語の使役動詞は、1つの動詞が実質的意味を表し、文法的機能（完了アスペクト）も表す。従って、日本語の使役動詞の使役を表す要素は顕在的に表示し、動作と同時に結果も含意する。

一方、ベトナム語は1つの動詞は実質的意味しか表さない、文法的機能（完了アスペクト）を表したい場合は文法を表す機能語を挿入する（(2)bと (2)cを参考)。従って、ベトナム語の使役動詞は動作主の行為のみを表すが、状態/位置変化の結果を生じさせる潜在的な可能性を持っている動詞である。つまり、日本語と異なり、ベトナム語の使役動詞の使役を表す要素は潜在的に表示する。結果（完了アスペクト）を表したい場合は、状態/位置変化を表す結果の自動詞と連結する。

よく理解できるように、下記に日本語とベトナム語の使役動詞を詳細に説明する。

3.2.1　日本語の使役動詞

下に挙げたものは日本語の使役動詞である。

(13)　壊す、潰す、切る、曲げる、折る、染める、塗る、揚げる、温める（cf.影山1996）

(13)は主語の何らかの行為によって、目的語の状態/位置変化の達成を表す他動詞である。従って、3.1の働きかけ動詞と異なり、このような他動詞は働きかけと同時に状態/位置変化の結果を表すので、次の（14）と（15）のような文はあり得ない。

(14)　*殺人者は人を殺したが、死ななかった。
(15)　*子供は枝を折ったが、折れなかった。

（14)、(15）の使役動詞「殺す、折る」は「殺した、折った」の行為と同時に状態/位置変化の結果「死んだ、折れた」ということを含意している。従って、(14)、(15）の2つの文は意味的な矛盾があるので、不適格である。

このように、日本語の使役動詞は使役を表す要素を顕在的に表示し、単純な動詞が動作と同時に状態/位置変化の結果も表す。すなわち完了アスペクトも含意する。日本語の使役動詞の意味構造を次の（16）に示した。

(16)　**使役動詞＝達成働きかけ（他動詞の完了形）＋状態/位置変化（自動詞の完了形）**

壊す	壊した	壊れた
割る	割った	割れた
燃やす	燃やした	燃えた
暖める	暖めた	暖まった
汚す	汚した	汚れた

放す	放した	放れた
乾かす	乾かした	乾いた
曲げる	曲げた	曲がった
倒す	倒した	倒れた
上げる	上げた	上がった

3.2.2 ベトナム語の使役動詞

日本語と同様にベトナム語にも使役動詞が存在する。しかし、日本語と異なり、ベトナム語の使役動詞には2つの種類がある。1つ目は、日本語と同様、1つの単純動詞でも行為と同時に状態/位置変化の結果を表す動詞である。2つ目は、状態/位置変化を表さないが、使役を潜在型で表す他動詞である。即ち、これらの他動詞は働きかけのみを表すが、状態/位置変化の結果を表す自動詞と結合することが出来る。従って、3.1の働きかけ動詞は状態/位置変化を表す自動詞と結合することができないのに対して、これらの他動詞は結合することができ、ベトナム語の手段結果複合動詞となる。

3.2.2.1 働きかけと同時に状態/位置変化を起こす単純動詞

日本語と同様に1つの単純動詞でも、働きかけと同時に状態/位置変化の結果も表す動詞がある。しかし、日本語では、働きかけと同時に状態/位置変化の結果も表す動詞は使役動詞であるのに対して、ベトナム語では、このような動詞は働きかけを表す他動詞と同時に状態/位置変化の結果を表す非対格自動詞である（cf.Nguyen Thi Hoang Yen 2016:37）。つまり、次の（17）の動詞は他動詞としても、自動詞としても用いられる。

（17） tắt「消す／消える」、bật「つける／つく」、mở「開ける／開く」、đóng「閉める／閉まる」、dừng「止める／止まる」、xoay「回す／回る」、khóa「掛ける／掛かる」（cf.Nguyen Thi Hoang Yen 2016:37）

（18） a. Họ　đã　***tắt***　đèn.
　　彼ら　過去　消す　電気
　　彼らは電気を消した。

　b. Đèn　đã　***tắt***.
　　電気　過去　消す
　　電気が消えた。

（19） a. Cô ấy　đã　***khóa***　cửa　phòng.
　　彼女　過去　かける　ドア　部屋
　　彼女は部屋のドアにカギをかけた。

　b. Cửa　phòng　đã　***khóa***.
　　ドア　部屋　過去　かかる
　　部屋のドアのカギがかかった。

（17）のように、ベトナム語では自動詞/他動詞の形式は変わらず、同じ形式で表現され、文の語順によって、自動詞か他動詞かが決まる。(18)aと（19)aの動詞（「tắt－消す、khóa－かける」）は目的語（「đèn－電気、cửa phòng－部屋のドア」）をとり、主語（「họ－彼ら、cô ấy－彼女」）が目的語に及ぶ動作を表す動詞なので、他動詞である[1]。常に、他動詞は「S1 V S2」の形式である。それに対して、(18)bと（19)bの場合（「tắt－消える、khóa－かかる」）は動詞が主語（目的語からなる主語）（「đèn－電気、cửa phòng－部屋のドア」）の後につき、目的語の状態変化を表すため自動詞である。自動詞の一般的な形式は「S2 V」の語順である。

このように、日本語の自動詞/他動詞は接辞によって表されるのに対して、ベトナム語の自動詞/他動詞は形式が変わらない。そのため、同じ動詞が自動詞としても、他動詞としても用いられる動詞が存在する。従って、これらの動詞は状態/位置変化を伴う他動詞を表し、同時に、状態/位置変化の結果自動詞を表す。これは日本語の使役動詞と同様である。

3.2.2.2　使役を潜在型で表す動詞

日本語の使役動詞は使役を顕在型で働きかけと同時に状態/位置変化の結果を表すのに対して、ベトナム語の使役動詞は働きかけのみ表すが、使役を潜在型で表すため、状態/位置変化の結果を表す自動詞と結合することが出来る。例を（20）に表示した。

（20）　bẻ「折る」、giết「殺す」、đun「沸かす」、xé「破る」、đập「打つ、砕く、叩く」chặt「切る」、bắn「撃つ」、đá「蹴る」、sờ「触る」、cọ「こする」

ベトナム語の使役動詞について、Nguyen Thi Thu Huong (2010:118) は「使役動詞は状態/位置変化の結果を生じさせる潜在的な可能性を持っている動詞である。その証拠にこれらの動詞は状態/位置変化の結果を表す自動詞/形容詞との結合が可能である」(筆者訳)。言い換えれば、ベトナム語の使役動詞は行為しか表さないが、使役を表す要素を潜在的に含んでいる。結果を表したい場合は、状態/位置変化の結果を表す動詞と連結する。これが手段結果複合動詞である。

3.2.2.3　ベトナム語の手段結果複合動詞の構成構造

3.2.2.2のように、ベトナム語の手段結果複合動詞はV1－使役の要素を潜在的に表示する動詞とV2－結果動詞を連結し構成される。具体的な形式は次の（21）である。(cf.Nguyen Thi Thu Huong 2010:118を筆者改変)

（21）　**使役を潜在的に表示する動詞　＋　結果動詞　⇒　手段結果複合動詞**

bẻ	gãy	bẻ gãy
折る	折れる	折る 折れる
giết	chết	giết chết
殺す	死ぬ	殺す 死ぬ
đun	sôi	đun sôi
沸かす	沸く	沸かす 沸く

xé　　　　rách　　　　xé　rách
破る　　　破れる　　　破る　破れる

（22）Tôi　đã　bẻ　gãy　cành cây .
私　過去　折る　折れる　枝
私は枝を折った。

（23）Tên sát nhân　đã　giết　chết　năm　người.
者　殺　人　過去　殺す　死ぬ　5　人
殺人者は5人を殺した。

（21）は、（20）に示したベトナム語の使役の要素を潜在型で表す動詞「bẻ－折る、giết－殺す、đun－沸かす、xé－破る」で、状態/位置変化の結果を表す自動詞「gãy－折れる、chết－死ぬ、、sôi－沸く」と形容詞「rách－破れる」と連結すると、手段結果複合動詞となる。（22）と（23）はベトナム語の手段結果複合動詞の例文である。

更に、（20）に挙げた他動詞は使役を潜在型で表すため、状態/位置変化の結果を表す自動詞と結合することが出来る。つまり、これらの他動詞は日本語と同じではなく、状態/位置変化の意味を含意しない。そのため、状態/位置変化の結果を表す自動詞/形容詞と結合しない場合は、これらの他動詞は動作しか注目せず、動作の意図した目的は必ずしも達成されるとは限らない、未完了だから結果の否定ができる。具体的には、次の（24）、（25）である。

（24）a.　Tôi　đã　bẻ　cành cây、nhưng　nó　không　gãy　.
私　過去　折る　枝　しかし　それ　～ない　折れる
b.　直訳：私は枝を折ったが、それが折れなかった。
c.　私は枝を折ろうとしたが、それが折れなかった。

（25）a.　Tên sát nhân　đã　giết　năm người、nhưng　không　ai　chết.
者　殺人　過去　殺す　5　人　しかし　～ない　だれ　死ぬ
b.　直訳：*殺人者は5人を殺したが、だれも死ななかった。
c.　殺人者は5人を殺そうとしたが、だれも死ななかった。

（24）aと（25）aは、ベトナム語の他動詞「bẻ－折る、giết－殺す」は、主語「Tôi－私、Tên sát nhân－殺人者」の動作しか表さず、目的語の状態/位置変化の結果に言及しないものである。そのため、後節の結果を表す文は否定文（「nó không gãy－それが折れなかった」、「không ai chết－だれも死ななかった」）が許容される。一方、日本語の使役動詞は働きかけと同時に状態/位置変化の結果も表す。すなわち、完了アスペクトも含意するため、（24）bと（25）bは意味的な矛盾があり、不適格となる。正確な文は、（24）cと（25）cの文である。

このように、日本語と同様にベトナム語の他動詞にも働きかけのみを表す動詞と働きかけと同時に状態/位置変化の結果を表す他動詞が存在する。しかし、ベトナム語では、動作と結果の含意を表す単純動詞（自/他同形式の動詞）もあれば、使役を潜在型で表す他動詞も存在する。こ

の使役を潜在型で表す他動詞は状態/位置変化の結果を表す自動詞と結合すると、手段結果複合動詞になり、日本語の使役動詞に対応する。

次の（26）はベトナム語の手段結果複合動詞に対応する日本語の使役動詞である。

（26）　**ベトナム語の手段結果複合動詞と日本語の使役動詞の対応表**

V1 （他動詞－動作）	V2 （非対格自動詞－結果）	ベトナム語の 手段結果複合動詞	日本語の 使役動詞
phá－壊す	hỏng－壊れる	phá hỏng　壊す＋壊れる	壊す
đun－沸かす	sôi－沸く	đun sôi　沸かす＋沸く	沸かす
xé－破る	rách－破れる	xé rách　破る＋破れる	破る
nhét－入れる	vào－入る	nhét vào　入れる＋入る	入れる
hạ－下げる	xuống－下がる	hạ xuóng　下げる＋下がる	下げる
nâng－上げる	lên－上がる	nâng lên　上げる＋上がる	上げる

出所：Nguyen Thi Ai Tien（2014）『日本語とベトナム語における使役表現の対照研究―他動詞、テモラウ、ヨウニイウとの連続性―』博士論文 大阪大学72pを参考に筆者作成。

（26）のように、ベトナム語では、日本語のように働きかけと同時に状態/位置変化の結果を表す他動詞に対応する1つの単純な他動詞に出来ない。日本語の単純語の使役動詞「壊す、沸かす、破る、入れる、下げる、上げる」等は、ベトナム語では、対応する動作を表す他動詞「phá－壊す、đun－沸かす、xé－破る、nhét－入れる、hạ 下げる、nâng－上げる」と状態/位置変化の結果を表す非対格自動詞「hỏng－壊れる、sôi－沸く、rách－破れる、vào－入る、xuống－下がる、lên－上がる」の複合である。これらの複合からベトナム語の手段結果複合動詞が形成される。

しかし、日本語では、結果構文を表すため単純な使役動詞のパターンではなく、V1とV2は独立した述語であるが、結合して手段結果複合動詞となるものもある（2を参考）。

次の（27）と（28）は単純使役動詞と手段結果複合動詞の例である。

（27）a.　彼女は花瓶を粉々に割った。　　　　　　**使役動詞**

　　　b.　彼女は魚をからからに干した。

（28）a.　こどもは花瓶を叩き壊した。　　　　　　**手段結果複合動詞**

　　　b.　彼はボールを蹴り飛ばした。

（27）の「割る」、「干す」の語彙概念には結果性が含まれている。従って、「粉々」、「からから」のような結果述語がそれらの動詞を修飾することができる。つまり、「割る」、「干す」ということから、「粉々」、「からから」という結果状態が引き起こされる可能性がある。

それに対して、（28）はV1「叩き」、「蹴り」の語彙概念には結果性が含まれない。しかし、V1の「叩き」、「蹴り」などの行為に対して、V2「壊す」、「飛ばす」がその行為に伴う目的語の状態変化を表している（cf.影山1996）。

上記のように、日本語、ベトナム語共に手段結果複合動詞が存在する。ところが、日本語の手段結果複合動詞は他動性に関して同一のものしか組み合うことができない（他動性調和の法則

−2を参考)。それに対して、ベトナム語のV2の結果を表すのは他動詞ではなく、自動詞である。その原因は何だろうか、次に、日本語の手段結果複合動詞をベトナム語の手段結果複合動詞に対照してみよう。

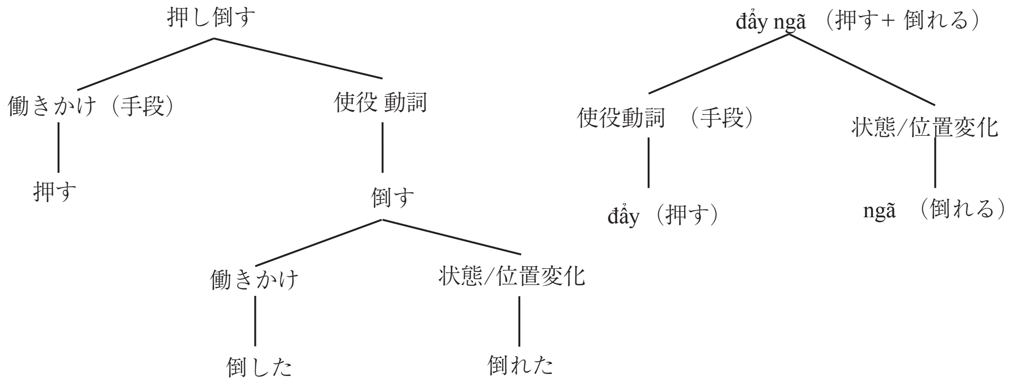
4　日本語とベトナム語の手段結果複合動詞の対照

松本（1998:52）は「日本語の手段結果複合動詞は前項動詞は全て動作主的動詞であり、又、後項動詞は何らかの状態/位置変化の使役を表す動詞である。後項動詞（V2）の働きかけ（ACT）が後項動詞の述語であり、その意味的付加詞としての方法（Means）に前項動詞の意味構造が埋め込まれている」とする。つまり、日本語の手段結果複合動詞の前項動詞（V1）は、働きかけと同時に後項動詞（V2）の手段を表す。更に､V2は働きかけと同時に状態/位置変化を表す。従って、V1とV2は同じ動作主に限られる。又、2つの動詞は他動詞/非能格動詞の複合でなければならない。この構成構造は、影山（1993）の「他動性調和の原則」の制限にも従っている。

それに対して、ベトナム語は1つの動詞は実質的意味のみを持っており、文法的な意味を表したい場合は、文法的機能を持つ語を付ける。従って、ベトナム語の手段結果複合動詞のV1は使役動詞と同時にV2の手段を表す。しかし、ベトナム語の使役動詞は動作主の行為しか表さない、つまり、使役を表す要素は潜在的に表示される。従って、2つの述語「〈手段〉 + 〈結果〉」を2つの位置に代入する。使役を表したい場合は、使役を表す動詞を挿入する（(2)bを参考)。日本語とベトナム語の手段結果複合動詞の構成素の違いを簡単に示すと以下の（29）のようになる。

（29）　**日本語とベトナム語の手段結果複合動詞の構成構造**

a. 日本語の手段結果複合動詞　　b. ベトナム語の手段結果複合動詞



（29）のように、使役を表す要素の表示が異なるため、日本語とベトナム語の手段結果複合動詞の構成構造は異なる。更に、影山（1993）は、複合動詞は後項動詞（V2）の機能によって、統語的複合動詞と語彙的複合動詞に分ける。統語的複合動詞は後項動詞（V2）が補助動詞ないし助動詞的な機能を持ち、前項動詞（V1）を補文化する。それに対して、語彙的複合動詞は、V2が補助動詞機能を持たず、V1とV2共同で複合し、1語となるものである。

以下ではベトナム語の手段結果複合動詞は統語レベルで形成されるのに対して、日本語の手段

結果複合動詞は語彙的複合動詞であることを明らかにする。

4.1 ベトナム語の手段結果複合動詞の複合レベル

まず、ベトナム語の手段結果複合動詞の各表現について検討する。

上記の3.2.2.3のように、ベトナム語の手段結果複合動詞は他動詞と状態/位置変化の結果を表す自動詞と連結し形成される。

(30) giết chết－殺す死ぬ、bẻ gãy－折る折れる、xé rách－破る破れる、đun sôi－沸かす沸く

更に、ベトナム語の手段結果複合動詞は、V1が目的語を取り、かつ結果と連結している。このように、V1とV2の間に目的語を表わす名詞句が挿入するタイプもある。つまり、2つの動詞を分離することができ、1つの語ではなく、連結動詞句となる。次の（31）～(33）の例である。[V1 NP V2][3]（cf. Nguyen Thi Hai Yen 2016）

(31) **動詞 ＋ 目的語 ＋ 結果動詞**

bẻ	cành cây	gãy
折る	枝	折れる
đun	nước	sôi
沸かす	水	沸く
xé	áo	rách
破る	シャツ	破れる

(32) Tôi đã bẻ cành cây gãy .
私 過去 折る 枝 折れる
私は枝を折った。

(33) Tôi đã đun nước sôi.
私 過去 沸かす 水 沸く
私はお湯を沸かした。

また、ベトナム語では、動詞は単純に行為しか表さない。動作主の意図をはっきり表したい、すなわち使役を表現したい場合は、使役を表す動詞を使って、V1とV2の間に挿入する。次の（34）～（36）は使役を表す語をV1とV2の間に挿入し、3つの動詞が連結するものである。[V1 使役語 V2]（cf. Nguyen Thi Hai Yen 2016）

(34) **動詞 ＋ 使役を表す語 ＋ 結果動詞**

giết	cho	chết	殺して死なせる
殺す	させる	死ぬ	
chặt	cho	đổ	切って倒れさせる
切る	させる	倒れる	

đun　cho　sôi　沸かして沸かせる
沸かす　させる　沸く

（35）a. Tôi đã đun nước cho sôi.　**V1　NP　使役語　V2**
私　過去　沸かす　水　させる　沸く
私はお湯を沸かして沸かせる。

b. Tôi đã đun cho nước sôi　**V1　使役語　NP　V2**
私　過去　沸かす　させる　水　沸く
私はお湯を沸かして沸かせる。

（36）a. Tôi đã chặt cây cho đổ.　**V1　NP　使役語　V2**
私　過去　切る　木　させる　倒れる
私は木を切って倒れさせる。

b. Tôi đã chặt cho cây đổ.　**V1　使役語　NP　V2**
私　過去　切る　させる　木　倒れる
私は木を切って倒れさせる。

（35）aと（36）aは、V1が目的語を取り、かつ使役を表す語と結果が連結している例である。（35）bと（36）bでは、V1が使役を表す語を取り、かつ目的語と結果と連結している。

更に、ベトナム語の手段結果複合動詞には、1つ語で分離することができないタイプも併存する。これらの動詞は動詞と動詞の間に語や句などを挿入することができない。（cf.Nguyen Kim Than 1977）

（37）a. lật　nhào
伏せる　ひっくり返る　＝　転覆する

b. Cách mạng tháng Tám lật nhào được chế độ quân chủ（TC,44）[4]
革命　月　8　伏せる　ひっくり返る　～られる　制度　君主
直訳：8月革命は君主制度を転覆した。（TC, 44）

c. *Cách mạng tháng Tám lật chế độ quân chủ nhào được.
革命　月　8　伏せる　制度　君主　ひっくり返る　～られる

d. *Cách mạng tháng Tám lật cho chế độ quân chủ nhào được .
革命　月　8　伏せる　させる　制度　君主　ひっくり返る　～られる

（37）bは，動詞「lật－伏せる」に後続する動詞「nhào－ひっくり返る」は、目的語「chế độ quân chủ－君主制度」の結果（転覆した）を表している。（37）cと（37）dは手段結果複合動詞「lật nhào－転覆する」の間に名詞句「chế độ quân chủ－君主制度」、機能語「cho－させる」を挿入することは許されない例文である。

このように、ベトナム語の手段結果複合動詞は分離することができるタイプもあるし、分離できないタイプもある。しかし、このような2つの種類共に、V1が動作、V2が状態/位置変化の結果を表す自動詞の複合動詞のため、それらの動詞は達成的なことを表し、結果の否定は出来ない

ことになる。具体的例は次の（38）～（40）である。

（38） a. Tên sát nhân đã giết năm người, nhưng may mắn không ai chết.
者 殺人 過去 殺す 5 人 しかし 運よく ～ない 誰 死ぬ
直訳：*殺人者が5人殺したが、運よく誰も死ななかった。
殺人者が5人殺そうとしたが、運よくだれも死ななかった。

b. *Tên sát nhân đã giết chết năm người, nhưng may mắn không ai chết.
者 殺人 過去 殺す 死ぬ 5 人 しかし 運よく ～ない 誰 死ぬ
直訳：*殺人者が5人殺したが、運よく誰も死ななかった。

c. *Tên sát nhân đã giết khiến năm người chết, nhưng may mắn không ai chết.
者 殺 人 過去 殺す させる 5 人 死ぬ しかし 運よく ～ない 誰 死ぬ
直訳：*殺人者が5人死なせたが、運よく誰も死ななかった。

（39） a. Tôi đã bẻ cây, nhưng cây không gãy.
私 過去 折る 木 しかし 木 ～ない 折れる
直訳：*私が木を折ったが、木が折れなかった
私は木を折ろうとしたが、木が折れなかった。

b. *Tôi đã bẻ gãy cây, nhưng cây không gãy.
私 過去 折る 折れる 木 しかし 木 ～ない 折れる
直訳：*私が木を折ったが、木が折れなかった。

c. *Tôi đã bẻ khiến cây gãy, nhưng cây không gãy.
私 過去 折る させる 木 折れる しかし 木 ～ない 折れる
直訳：*私が木を折らせたが、木が折れなかった。

（40） *Cách mạng tháng Tám lật nhào được chế độ quân chủ, nhưng
革命 月 8 伏せる ひっくり返る ～させる 制度 君主 しかし
chế độ quân chủ không nhào.
制度 君主 ～ない ひっくり返る
直訳：*8月革命は君主制を転覆したが、君主制が転覆しなかった。

（38）aと（39）aのような場合は「giết－殺す、bẻ－折る」の前項動詞は結果まで言及しない状態/位置変化の結果を表す自動詞が直後に連結しないため、結果の否定ができる。

松本（1998:53）は手段とは、使役者がその使役を達成させるための一段階として行う具体的行為であると述べている。そのため（38）bと（39）bの場合は、前項動詞は手段（「giết－殺す、bẻ－折る」）を表し、後項動詞は結果を表す動詞（「chết－死ぬ」、「gãy－折れる」）を前項動詞の直後に連結するので、達成させるが、(38)bと（39)bの例文の後の節で、状態/位置変化が起こらず、不適格になる。

（38）bと（39）bはベトナム語でも日本語でもいずれも不自然な文である。松本（1998:53）は手段とは、使役者がその使役を達成させるための一段階として行う具体的行為であると述べている。従って、手段（「giết－殺す、bẻ－折る」）を表す前項動詞と状態/位置変化の結果（「chết－死ぬ」、「gãy

－折れる」)を表す後項動詞を結合すると､達成を表す。しかし、(38)bと(39)bの例文は後の節で、状態/位置変化が起こらず、不適格になる。

更に、(38)cと（39)cの場合は、使役を表す動詞（「khiến－させる」）は2つの要素の間に挿入するため、動作主の目的をはっきり表し、結果まで言及する。従って、(38)cと（39)cの後の節で結果の否定文は非適格である。

（40)「lật nhào－転覆する」の手段結果複合動詞は達成的なことを表す（動作のみならず、その結果も含意する）ので、結果の否定は出来ないことになる。

ベトナム語の手段結果複合動詞は、使役の要素を潜在的に表示する前項動詞は意味が許容できる限り、様々な状態/位置変化の結果を表す自動詞の後項動詞と結合する。その原因はベトナム語では状態/位置変化を表す述語は添加された関数ではないからである。Nguyen Thi Hoang Yen（2016:38）によると、「ベトナム語の状態/位置変化を表す述語は結果を表す意味として添加された関数ではない。このような述語は主述語と共に重要な構成をし、使役－結果を表す」（筆者訳)。ベトナム語の手段結果複合動詞はV1とV2の間の使役の要素を顕在的に表示しないため、当然意図的な行為を表さない。従って、生起可能な結果を表す（V2）は行為動詞（V1）の語彙概念の構造から判断できない。Ｖ１の行為動詞の辞書情報からV2の結果が予測できず、予想外の結果が現れる。つまり、ベトナム語の手段結果複合動詞は生産性が高い。一方、日本語では、働きかけを表す他動詞と状態/位置変化の結果を表すものと結合することは出来ない。

次の（41）はベトナム語の手段結果複合動詞の生産性と対応する日本語を示したものである。

(41)　**ベトナム語の手段結果複合動詞の生産性と日本語の対応表**

方法を表す他動詞 「sờ　触る」	結果を表す 自動詞/形容詞	ベトナム語の 手段結果複合動詞	日本語の 手段結果複合動詞
sờ　触る	nát　ダメ（形容詞）	sờ nát　触る＋ダメだ	*
sờ　触る	bẹt　平ら（形容詞）	sờ bẹt　触る＋平ら	*
sờ　触る	vỡ　割れる	sờ vỡ　触る＋割れる	*
sờ　触る	bẩn　汚い（形容詞） 汚れる	sờ bẩn　触る＋汚い	*
sờ　触る	rách　破れる（形容詞）	sờ rách　触る＋破れる	*
sờ　触る	đứt　切れる	sờ đứt　触る＋切れる	*

(42)　Minh　đã　***sờ***　***vỡ***　quả　trứng
ミンさん　過去　触る　割れる　類別詞　卵
ミンさんは卵に触って、卵が割れた。

(43)　Trẻ con　đã　***sờ***　***bẩn***　cái　áo　này
子供　過去　触る　汚い/汚れる　類別詞　シャツ　この、これ
子供はこのシャツに触って、シャツが汚れた。

(44)　Trẻ con　đã　***sờ***　***nát***　hoa.
子供　過去　触る　ダメ　花
子供は花に触って、花がダメになった。

（42）～（44）では、前項動詞（「sờ－触る」）は同じであるが、後項動詞の状態/位置変化の結果を表す自動詞/形容詞（「vỡ－割れる、bẩn－汚い、nát－ダメ」）が異なるため、文全体の意味も違ってくる。ベトナム語では結果を表す後項動詞は、文に単に添加されるだけでなく、主述語と結合して重要な構成構造になる。更に、「sờ－触＋bẩn－汚い、sờ－触＋ nát－ダメ」の「bẩn－汚い、nát－ダメ」は形容詞であるから目的語だけに掛かり「後項動詞の主語は前項動詞の目的語に当たる」、いわば、「自動詞的」であり（cf.景山1996:211）、構成素は他動詞と自動詞である。従って、影山（1993）の「他動性調和の原則」と松本（1998）の「主語一致の原則」はベトナム語には当てはまらない。

更に、複合動詞全体の意味がV1とV2の意味から構成的に導けるという点で意味的に透明であると言える。ベトナム語の手段結果複合動詞は1つの要素の意味から全体の複合動詞の意味が判断できるため、意味的に透明性が高い。

例えば、前項動詞の意味「cắt－切る」は道具を使って、何かを切ると言うことである。後項動詞の意味「hỏng－壊れる」は、何かが使えなくなる状態になるという意味である。2つの動詞の意味から全体の意味を判断できる（道具を使って、何かを切った結果、そのものが壊れる状態になる）。

次の（45）には、具体的な例を表す。

（45）	**前項動詞（V1）＋**	**後項動詞（V2）　＝**	**手段結果複合動詞**
	cắt	đứt	cắt đứt
	切る	切れる	切る 切れる
	xé	rách	xé rách
	破る	破れる	破る 破れる
	giết	chết	giết chết
	殺す	死ぬ	殺す 死ぬ
	đập	vỡ	đập vỡ
	砕く	割れる	砕く 割れる

（45）では、前項動詞の意味（「cắt－切る、xé－破る、giết－殺す、đập－砕く」）と後項動詞の意味（「đứt－切れる、rách－破れる、chết－死ぬ、vỡ－割れる」）を結合すると、全体の複合動詞の意味が判断できる（「cắt đứt－切る切れる、xé rách－破る破れる、giết chết－殺す死ぬ、đập vỡ－砕く割れる」）。従って、ベトナム語の手段結果複合動詞は透明性が高い。

（41）と（45）のように、ベトナム語の手段結果複合動詞は生産性と透明性が共に高い。そのために、ベトナム語の手段結果複合動詞は統語レベルで形成されることが支持されると言える。

4.2　日本語の手段結果複合動詞の複合レベル

まず、影山（1993）は「語という単位は句や文と異なり、語は形態的なまとまりを形成する」と述べている。この形態緊密性と呼ばれている制約は日本語では様々なテストによって検証できる。次は2つの代表的なテストである。

1つ目のテストは隣接性である。この制約は語の間には他の句や語などが侵入することが許されない。次の（46）はその例である。

（46）a. *彼は飲みお酒を歩く。　**語彙的複合動詞**
　　b. *雨が降り強く始める。　**統語的複合動詞**

（46）のように、語彙的複合動詞も統語的複合動詞も語の間に他の語（酒を、強く）が侵入することは許されない。もちろん、この制約は日本語の手段結果複合動詞にも適用できると考える。次の（47）を見られたい。

（47）　*彼は切り木を倒す。

予想した通り、日本語の手段結果複合動詞は2つの動詞が複合して、1つの動詞となる。つまり、日本語の手段結果複合動詞は1語であることが分かる。

2つ目のテストは代用形「そうする」である。日本語の語彙的複合動詞はV1を代用表現「そうする」で置き換えることはできない。それに対して、統語的複合動詞はV1を代用表現「そうする」で置き換えることができる。

（48）a. 遊び暮らす。→*そうし暮らす（cf.影山1993）　**語彙的複合動詞**
　　b. 調べ終える。→そうし終える　**統語的複合動詞**

（48）aの語彙的複合動詞は語彙照応の制約のため、語の一部を参照することができず、V1を代用表現に置き換えられない。それに対して、統語的複合動詞は語の一部は参照することができる。語彙的複合動詞と同様に、手段結果複合動詞は「そうする」代用表現に置き換えることはできない。（49）は手段結果複合動詞の例である。

（49）　子供はボールを蹴り飛ばした。→*子供はボールをそうし飛ばした。

以上のことから、日本語の手段結果複合動詞は語彙的複合動詞であることが分かる。それに対して、ベトナム語の手段結果複合動詞は統語的複合動詞であることを明らかにした。

5　まとめ

本論文により、日本語とベトナム語における手段結果複合動詞は、言語類型的特徴から制限に当てはまることが明確になった。日本語の手段結果複合動詞は複数の述語を1つの動詞に合成することが出来るため、3つの述語「〈手段〉 + 〈使役〈結果〉〉」を合わせた1つの動詞となる。つまり、日本語の使役動詞においては使役を表す要素は顕在的に表示し、動作と同時に結果も含意する。更に、日本語の複合動詞は構成素が他動性に関して、同一のものしか組み合わせられない

ため、手段結果複合動詞は前項動詞、後項動詞共に他動詞/非能格動詞同士の組み合わせるとなる。又、日本語の手段結果複合動詞は語彙レベルで形成される。従って、影山（1993）の「他動性調和の原則」と松本（1998）の「主語一致の原則」の制限に従う。

一方、ベトナム語は複数の述語を複数の位置に代入する。そのため、ベトナム語の手段結果複合動詞は2つの述語が「〈手段〉＋〈結果〉」を2つの位置に代入する。つまり、使役を表す要素は顕在的に表示し、使役動詞は動作のみ表し、完了アスペクトを含意しない。従って、結果を表したい場合は、状態・位置変化を表す結果の自動詞と連結する。更に、ベトナム語の手段結果複合動詞は統語レベルで形成される。このことから、ベトナム語の手段結果複合動詞は「他動性調和の原則」と「主語一致の原則」に当てはまらず、構成構造は「他動詞＋自動詞」となる。

〈注〉

1 ベトナム語の構文はSVO

2 S1:主語　V:動詞　S2:目的語

3 V1:前項動詞　NP:目的語　V2:後項動詞

4 TC, 44：TRUONG-CHINH, Cach mang thang Tam, Ha Noi ,1955　ベトナム語の文学作品

5 表36の「結果を表す自動詞/形容詞」欄の単語は、ベトナム語では形容詞である。

〈参考文献〉

影山太郎（1993）『文法と語形』ひつじ書房

影山太郎（1996）『動詞意味論』ひつじ書房

沈力（2013）「結果複合動詞に関する日中対照研究—CAUSE健在型とCAUSE潜在型を中心に—」影山太郎（編）『複合動詞研究の最先端』375–411　ひつじ書房

松本曜（1998）「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』114、37-83

Nguyen Kim Than（1976）“Động từ trong Tiếng Việt ” *Nhà xuất bản khoa học xã hội*

Nguyen Thi Ai Tien（2014）『日本語とベトナム語における使役表現の対照研究—他動詞、テモラウ、ヨウニイウとの連続性—』博士論文　大阪大学

Nguyen Thi Hai Yen（2016）“Các kiểu cấu trúc kết quả tiếng Việt,” *Tạp chí khoa học DHSPTPHCM*, 2（80），33-42

Nguyen Thi Hai Yen（2016）“Về cặp vị từ gấy khiến – khởi trạng trong tiếng Việt,” *Tạp chí khoa học DHSPTPHCM* 8（86），77-88

Nguyen Thi Thu Huong（2010）“Cấu trúc gây khiến – kết quả trong tiếng Anh và tiếng Việt” 博士論文　国家大学

Nguyen Thi Quy（1994）“Vị từ hành động tiếng Việt và các tham tố của nó －So sánh với tiếng Nga và tiếng Anh－” 博士論文 *Viện khoa học xã hội tại thành phố Hồ Chí Minh*

Nguyen Hoang Trung（2014）“Vài nét về kết cấu gây khiến trong tiếng Việt ” *Tạp chí khoa học DHSPTPHCM*　63，16-27

Tran Thi Chung Toan（2002）“Động từ phức hợp tiếng Nhật và các đơn vị tạo nghĩa tương đương trong tiếng Việt” 博士論文 *Đại học Quốc Gia Trường DHKHXH&NV*.

由本陽子（1996）「語形成と語彙概念構造—日本語の『動詞＋動詞』の複合形成について—」奥田博之教授退官記念論文集刊行会（編）『言語と文化の諸相— 奥田博之教授退官記念論文集—』105-118　英宝社

由本陽子（2005）『複合動詞/派生動詞の意味と統語』ひつじ書房